

故榎本宗次氏の人と業績

史料館長であつた榎本宗次氏が、昭和五十七年三月十一日不測の事故のため、五十七歳という働き盛りにありながら現世から旅立たれてしまった。まことに痛恨きわまりない突発事であつたが、ここにその人と業績を回顧し、もつて長く館務に精励された故人を偲ぶよすがとしたい。

史料館は昭和二十四年に当時の学界有識者九十五名の請願にもとづいて、わが国近世史料の保存と利用にかかわる学術活動を実施すべく、はじめ文部省大学学術局学術課のち情報図書館課内に設置され、昭和四十七年に至つて国立大学共同利用機関としての「国文学研究資料館」創設にともない、その組織内に所管換えとなつた。鈴木寿史料館長の退職のあとをうけて、昭和五十二年四月史料館長に就任した榎本宗次氏は、近世史料の保存と活用のための学術情報整備について、より一層の活動を達成すべく努力を傾注され、その成果がかたちをなしつつある時に、思わぬ奇禍に遭遇されたのである。

故人は、大正十三年十二月十八日山形県鶴岡市に生まれ、昭和十八年九月山形高等学校を卒業、同年十月東京帝国大学文学部国史学科に入学、途中同二十年七月から九月まで兵役に服したのち、同二十二年三月同大学を卒業、同年四月より二カ月間奈良女子高等師範学校附属高等学校講師を勤め、同年六月山形県酒田市の財団法人光丘文庫に就職、翌二十三年五月から山形県鶴岡市立鶴岡第一中学校、山形県立鶴岡第一高等学校教諭を経て、同二十五年三月山形大学文理学部教官に就任、同四十二年六月人文学部に配置換となり、教養部および教育学部を併任、此の間助手・

講師・助教授と昇任した。同四十二年七月文部省史料館に転出、第二史料室長となり、同四十七年五月国文学研究資料館創設にともない、同館教授・史料館第二史料室長および情報閲覧室長併任となった。同五十二年四月史料館長となり、情報閲覧室長を引き続いて兼ねた。この間、専攻分野である日本近世史において数々の研究論文を発表した。それらはいくつかの主題にわけることができる。

その第一は、近世における切支丹研究である。つとに昭和二十七年「切支丹殉教の一考察」(掲載誌などは後掲論文一覧を参照されたい。以下同じ)を発表して、この問題に対する関心を深め、これ以後の一連の論文によって、キリスト教の東北地方への布教と伝播、それに続く弾圧と類族に対する取締まりにいたる切支丹史の研究成果を世に問うた。戦前の研究が記述史料におおくもとづいていたのと異なり、山形藩や米沢藩の藩庁記録など、原史料の採訪・収集にもとづいた着実な考証と分析とによって、新知見を開拓したものであった。

業績の第二としては、藩制史に関する諸論考がある。昭和三十年に伊東多三郎教授を中心に結成された藩制史研究会は、この分野で嚮導的役割を果たしたが、昭和三十三年に協力を請われてこれに参加した故人は、とくに米沢藩上杉家文書を駆使していくつもの研究を発表した。なかでも大名家臣団としての給人の知行形態や在郷家臣の経営の実態など知行制度の実証的な研究に寄与し、それらは『藩制成立史の総合的研究』所収の論文「知行制度の成立」に結晶されている。

業績の第三は、出身県である山形県にかかわる地方史的研究である。これは他の分野における諸研究についても共通してみられる郷土的関心と造詣によるものといえる。前記の切支丹、藩制、後出の領国貨幣の研究も、その根元においては常に地方史に連なるものがあつた。これは単に出身県というだけでなく、教官の任地として前後約二十年に及んでいることの必然的な結果であろう。昭和三十四年には鶴岡市史の編纂に参加し、大瀬欽哉・斉藤正一の阿氏と

協同して、同三十七年に八百余頁の『鶴岡市史』を編纂・執筆したのをはじめ、『山形市史』・『東根市史』など山形県のいくつかの地方史誌の編纂に関与し、それぞれに執筆あるいは適切な助言を与えている。そうした地域社会への貢献を支えたのは、たとえば「荘内藩確立過程における大庄屋」のような制度的側面を解明するという基礎的研究はもちろんのことであるが、むしろ「俳人鈴木清風の豪農的側面」といった個別人物像、あるいは「寛永飢饉と身売」、「元禄の水運労働者」といった社会の底辺にある人間への目配りを通して歴史を見る視野の確かさにあったのである。故人の歴史家としての素質の奥に潜むヒューマンな感覚の深さに思い至るのである。

業績の第四は、領国貨幣の研究である。転任直後の昭和四十三年『史料館研究紀要』第一号に「近世前期における領国貨幣について」を発表した。おそらく山形大学在任中、自らのそれまでの研究分野に新しい領域を開拓しようとして、すでに史料を博搜されており、そこへ「諸国灰吹銀寄」なる好史料に接する機会を得て、一段と拍車がかかり、意欲的に成稿されたものようである。そのあと矢継早やに「近世前期貨幣史における若干の問題」、「近世前期領国貨幣とその停廃」、「近世における貨幣統一の側面」、「近世初期銀貨考——リチャード・コックス日記を中心に——」と、貨幣史に関する論文が公表された。とくに最後にあげた論文は英文原書『コックス日記』を精読・駆使されたものであり、また史料館での「豆州内浦大川家文書」の整理・目録作成を通じ得た知見は「古銭と寛永銭の切替について」、「豆州内浦における京銭」という中間報告において領国貨幣論を支える貴重な論点を提示している。英語・フランス語に堪能であり、近來ギリシャ語習得にまで及んでいた故人の抜群の語学力と旺盛な知識欲は、洋の東西を問わない史料への沈潜と渉猟の広さに現われ、ぬきんでた能力を示すものであった。

こうした一連の領国貨幣に関する諸論文は加筆・訂正され、編序を整えて『近世領国貨幣研究序説』として上梓された。本書には稀観の史料「諸国灰吹銀寄」の影印と翻刻が収められ、広く研究者の利用に便宜を与え、本文篇とと

もに領国貨幣研究にとつてまことに貴重な貢献をなしている。また本書に依拠しながら新たに書下した英文論文“Domain Coins in the Early Edo Period”は、その業績を国際的に問うものであった。

以上のごとく、故人の研究は大別して四分野にわたるが、一面において一貫した共通の性格を有している。何よりも温厚篤実、細心精緻な故人の性格を反映して、研究に際しては謙虚に先人の学説にたずね、史料の立証には万全を期して怠る所がなかった。しかもその才能は学問の世界に踰越することなく、俳諧や随筆をよくし、陶磁器に関する蘊蓄も深く、また演劇・絵画等々にまで及んで多彩であり、実に巾広く豊かな内面を構築していたのである。

最後に文部省史料館に着任後のことにふれておけば、近世史料の収集、整理、保存、利用、調査研究という史料館業務の各方面について深い理解と優れた実行力を示した。昭和五十二年に史料館長に就任してからは、館員の融和をはかりつつ、諸業務の円滑な運営につとめた。この間、当館所蔵史料のうち重要なものを翻刻する『史料館叢書』を創刊し、地方史誌や史料目録の集書にも理解を示し、『史料館所蔵目録一覽』(近世史料・郷土資料の部) (昭和五十五年刊)を刊行せしめた。史料館にとつても懸案の事項は山積しており、今後也大いに活躍と指導力が期待されただけに、功業半ばにして急逝されたことは、まことに残念といわねばならない。ここに故人のひとと業績の一端を述べて、心から御冥福を祈念するものである。

(安澤秀一)

著書論文一覽

(著書)

「近世領国貨幣研究序説」

東 洋 書 院

昭和五十二年

(論文)

切支丹殉教の一考察

俳人鈴木清風の豪農的側面

平賀源内と構について

寛永飢饉と身売

上杉藩における給人知行について

荘内藩確立過程における大庄屋

「慶安御触書」考

初期米沢藩の農村支配

在郷家臣と手作について

―米沢藩の知行制度―

木版『慶安御触書』の後書

国内史料よりみた米沢切支丹

山形の切支丹（「切支丹風土記・東日本篇」所収）

（「きりしたんの愛と死―その歴史と風土と―」と改題して 昭和四十二年東出版より再版）

米沢藩の知行制度

―相給的知行形態の意味―

「鶴岡市史」上巻

故 榎本宗次氏の人と業績

山形大学紀要（人文科学）二巻二号

昭和二十七年

日本歴史六九号

昭和二十九年

日本歴史九五号

昭和三十一年

日本歴史一一三号

昭和三十三年

歴史の研究六号

昭和三十三年

山形大学紀要（人文科学）四巻三号

昭和三十四年

歴史評論一〇六号

昭和三十四年

歴史教育七巻二号

昭和三十四年

歴史の研究七号

昭和三十四年

日本歴史一二九号

昭和三十四年

基督教史学一〇集

昭和三十五年

宝文館

昭和三十五年

歴史の研究八号

昭和三十五年

鶴岡市役所

昭和三十七年

知行制度の成立

吉川弘文館

〔大瀬欽哉・斎藤正一と共編〕

日本歴史二〇五号

〔藩制成立史の総合的研究〕第三章

元祿の水運労働者

昭和三十八年

米沢藩

〔物語藩史〕第一期第一卷所収

人物往来社

昭和四十年

荘内藩

〔物語藩史〕第二期第一卷所収

人物往来社

昭和四十一年

荘内藩と武器商人 赤羽スネル

日本歴史二一二号

昭和四十一年

上杉鷹山と藩政改革

〔週刊時事通信〕五回連載

時事通信社

昭和四十一年

上杉治憲

〔大名列伝〕第四卷所収

人物往来社

昭和四十二年

鈴木家文書と船乗下人

文部省史料館報五号

昭和四十二年

近世前期における領国貨幣について

史料館研究紀要一号

昭和四十三年

切支丹類族について

文部省史料館報六号

昭和四十三年

古銭と寛永銭の切替について

文部省史料館報七号

昭和四十三年

豆州内浦史料における京銭

文部省史料館報八号

昭和四十四年

近世前期貨幣史における若干の問題

— 領国貨幣を中心として —

近世前期領国貨幣とその停廃

藩政初期の目安

〔古事類苑月報30〕

近世における貨幣統一の一側面

「近世古文書学」問題点の素描

上杉鷹山

〔日本と世界の歴史〕第一六卷 一八世紀(Ⅰ)

切支丹の波及

〔山形市史〕中巻 近世編所収)

近世初期銀貨考

— リチャード・コックス日記を中心に —

大川家の樟脳製造

荘内藩

〔日本の歴史〕第一巻)

荘内藩・米沢藩

〔新編物語藩史〕第一巻)

故 榎本宗次氏の人と業績

日本歴史二四八号

昭和四十四年

歴史教育一七巻七号

昭和四十四年

吉川弘文館

昭和四十四年

史料館研究紀要三号

昭和四十五年

文部省史料館報一二号

昭和四十五年

昭和四十五年

山形市

昭和四十六年

史料館研究紀要五号

昭和四十七年

史料館報二〇号

昭和四十九年

山田書院

昭和五十年

新人物往来社

昭和五十年

銀座史料「諸国灰吹銀寄」について

史料館報二七号

昭和五十二年

近世史料の体系化に関する基礎的研究

史料館研究紀要一〇号

昭和五十三年

Domain Coins in the Early Edo Period

Acta Asiatica Bulletin of the Institute of Eastern Culture No. 39 (東方学会 1980)

